

「茶旅」

”こぼればなし“

(31) 香港で作られていた 普洱茶(2)

コラムニスト 須賀努



普洱茶というものを盧さんの存在で再認識し、それから色々な茶畑、茶荘を歩いている間も常に気にかけていた。普洱茶には生茶と熟茶があり、伝統的普洱茶は生茶であること、生茶は生産に時間が掛かることから、その時間を短縮する手法として、熟茶の生産が始まったことなどを知った。だが中国の資料を見ると、1974年に雲南省昆明茶廠の呉啓智という女性が苦労を重ねて熟茶の製法を発明したと書かれている。では長洲島の話は何だったのだろうか。

1949年中国本土では共産党が建国し、資本家が追い出されていき、企業や産業の国営化が進んでいく。茶業に関して1953年に広東省茶葉輸

出入会社が設立され、広東の茶貿易はここに一手に集約されていく。戦前は一体だった広州、マカオ、香港の体制は崩れ、原料である茶葉はマカオ、香港には入り難くなっていく。

ここにもう一人の男性が浮かび上がってきた。名を張成という。張成は輸出入会社に勤務しており、当時統一買付で大量に送られてきた茶葉を如何に処理するかという問題を抱えていた。香港などへ輸出するためにも、顧客のニーズに合う味わいの茶が期待され、1955年には普洱茶研究小組の成員となる。人工的に素早く加工する普洱茶を研究して、その開発に成功していたらしい。1957年から輸出が始まり、50年代終わりには茶餅も作り

始めたという。いわゆる『広東普洱』と呼ばれるお茶の出現であった。その後市場のニーズを満たし、輸出は順調に伸び、80年代には輸出量No.1にまでなるヒット商品となった。

この情報をくれたのは70年代から張成氏と一緒に働いていた桂埔芳女士。全くの余談だが筆者は昨年10月に、広東茶文化促進会の紹介で彼女に会っていたのだが、その時は紅茶輸出の歴史ばかりを聞いてしまい、まさか彼女が広東普洱の後継者などとは露知らず、後から聞いて驚いてしまった。これも違った意味での茶縁だろうか。

先日長洲島の盧さんのものを久しぶりに訪れた。今年90歳になり、足もだいぶ弱っていたが、元気な笑顔を見せて聞いてみると『彼のことはよく知っているよ。自分が長洲島に移った後マカオの英記茶荘を訪ねてきたと連絡があり、マカオで会ったよ。同郷人(同じ広東省順徳出身)が困っているのを

見かねて、自分が開発した製法を教えあげたんだ』というではないか。確かに盧さんに以前もらった資料に書かれていた熟茶製法は、広東普洱とよく似ている。全くの推測だが、張成氏は盧さんの製法も大いに参考にして、その精度を上げて、広東普洱を完成させたのではないだろうか。

また雲南省昆明茶廠は1973年に



写真:広東普洱の後継者 桂埔芳女士(右)

香港より熟茶の注文を受け、その開発に取り込んだとある。ということは当然、香港には熟茶に該当する茶が既にあったということを物語ってはいないだろう。呉啓智はすぐに広州に赴いて教えを乞うたが拒否されたとも聞く。この話から、少なくとも熟茶の基礎は盧さんと張さんが作ったと言ってしまうのではないかと思う。

ただ盧さんはなぜこの島へ来たのか、という疑問は残っており、そこは解明できないでいる。長洲島は海と繋がっており、タイやベトナムなど色々なところから茶葉をかき集めて作ったというが、1960年以降チベットへの輸出が途絶え、広東普洱が回るなど、不遇の時代を迎えることとなった。『張成に教えたのは失敗だったな。まさかあんなに作るとは思ってもみなかった』と盧さんは笑うが。

彼は原料の茶葉と自由に作れる環境を求めて、長洲島からタイに渡ったという。タイの北部は中国雲南省にも近

く、中国で文化大革命が起こっても原料が手に入らなかったらしい。『1975年にはバンコックのスクンビット、ソイ53で熟茶を作っていましたよ』とはっきり説明してくれたのは、盧さんの息子だった。なぜそんなにはっきりと覚えているのかと聞くとちよつと照れながら『そこぞ今のかみさんと知り合っただから』というではないか。彼の奥さんはタイ人だった。

1990年代に入ると、タイでの生産コストも上がり、ベトナムへ作りに行った。ベトナムも中国雲南、広西などと接しており、原料は豊富だったらしい。『共産主義だったが、当時はコストが非常に安かったから行った』という。茶作りは農業の側面が強いが、製茶業としては工業的な面が重視される。まさに日本企業がコストを追及してアジアに進出したように、盧さんの熟茶作りが動いていったのは、実に興味深い。

(すが つとむ)